

2016

友引町内会  
通信

Vol.196

6



五月雨や畳に上がる青蛙

正岡子規

五月雨は陰暦の5月（陽暦の6月）頃に降る長雨で、田植え時の恵の雨、夏の季語です。青蛙も夏の季語で、都会では少なくなりましたが、田んぼの近くではこれから元気に鳴き出します。うっとうしい雨の日に、病床の子規の前へまるで雨宿りに来たように青蛙が上がり込んだのかも。「おや、可愛い客人の来訪！」

## 普段着のわたしたち



扇風機登場！・・・

5月中旬から早々とお出まします。

漏電が心配

されるかなりの老体を含め新顔も勢揃い、出番を待っています。今年の夏も暑くなりそうですね？

幽思房

去る5月8日、俊徳丸さんのお寺の「きつね稚児」に参加させていただきました。晴天に恵まれ、堤防を渡る川風が心地よく、我が家の小坊主もご機嫌に闊歩しました。また1年健やかに暮らせることを念じつつ。



普通の稚児装束に加えシッポがあるのがとても cute! (親ばか)

訶梨帝母

車にベトリ付着した黄砂。お隣から



様々な有害物質を吸着して飛来し、それを我々

は毎日毎日吸い込む・・・。多分、そういうことを考えない方が身体には良いのだろうけど。これを見てしまうと、そういう訳にもいきませんよねえ (苦笑)

露の身

4月21日に総本山光明寺へ本山参りに行きました。



帰り道に世界遺産の宇治の平等院鳳凰堂へ。数年前と全然違う！ 修復されて美しさが蘇っていました。

征阿



よそのお寺へ行ったら、お金を入れると「にゃーにゃー」と鳴く貯金箱がお賽銭箱として設置されていました。私もマネをしました。時々、

入れても鳴かない時があります。そんな苦情に対して、「猫は犬と違って気ままなので、最初から時々鳴かないように作ってあるそうです」と言っています。嘘です。猫がおおちゃくをしているだけです。

俊徳丸

初めて見ました。日本ミツ

バチの分蜂ぶんぼうです。仲間が増えすぎると、新しい女王蜂と一緒に飛



び立ち、元の巣には適正な数だけ残ります。

私的費用を政治資金で流用という蜜の味を暴露され、言い訳をしては墓穴を掘っている人がいます。東京都民の心は分蜂直前のミツバチのようでは・・・。

迷走坊

## スターバックスと寺院

檀家さんの月参りを朝6時から行って、8時にちよいとハンディーのある娘を起し朝食を食べさせ、9時に介護施設に送り届けると、夕方4時まで自由になる日がたまにあります。そんな日はその足で新幹線に乗り、「六角堂」へ行きたくになります。



京都駅から地下鉄に乗り烏丸御池駅を下車、5番出口から地上に出ると烏丸通

り沿いに続くオフィス街です。間もなくスターバックスがあり六角通り、その角を左(東)に曲がった所に六角堂はあります。地元の人からは「六角さん」と呼ばれていますが、お寺の正式名は、「紫雲山しうんざん 頂法寺ちやうほうじ」と言います。それほど広大ではない境内は、四方を近代的なビルに取り囲まれています。そんなビルの谷間から突如、楠の老木と山門が現れます。

名前の如く、山門を入り正面に六角形の堂々たる本堂があり、御本尊は聖徳太子の念持佛ねんじぶつと言われている「如意輪観音菩薩にょいりんかんのんぼさつ」です。地獄図の中では、「血の池地獄」の畔で女性を助け出しておられます。「西國三十三観音霊場」の第18番札所でもあります。現在、京都は外国人観光客でどこも混雑していますが、ここはそうではなく巡礼者やご近所のお参りの方がちらほらという感じです。

六角堂の特筆すべき点は、四方を近代的な建物に囲まれているにもかかわらず、その霊験あ

らたかな古刹のたたずまいと無機質なビルとの違和感がなく調和していることです。ですから息苦しさや風通しの悪さを感じません。写真の御堂のお隣は「WEST18」という10階建ての多目的ビルです。1階にはスターバックスが入っています。普通でしたら寺方は、ビルとの境に瓦をのせたお寺らしい白壁の塀を建てることでしょう。しかしそうしなかったのは「WEST18」の設計に工夫があるからです。

WEST18は烏丸通りと六角通りの角に建ち、本来でしたら烏丸通りから六角堂境内は10階建ビルの陰に隠れてしまい見ることはできません。しかし、1階のスタバの境内側と烏丸通り側両面を全面ガラス張りにすることによって、以前は烏丸通りからは見ることは出来なかった六角堂境内がその2枚のガラス越しに見えるようになりました。新しい空間と古い空間に「境」をつくらないことによって、また工夫して多くの良い点が生まれることになりました。このスタバでは、観光客ではなく近辺で仕事している人が普通にコーヒータイムを楽しんでいます。店内から境内を眺めながらのコーヒーは気分良く、世界中探してもこんなスタバはないでしょう。更にお店の横にはガラス張りのエレベーターがあり、上空から本堂の六角形の屋根と境内全域を見ることができます。

六角堂は「いけばな」の発祥の地でもあり、代々当寺御住職は華道「池坊」の家元でもあられます。華道の四季折々に咲く花との触れ合いの心が、この新旧融合した境内地の不思議な空間を生んだのだと思います。 俊徳丸

## 『私説法然伝』(17)

法然誕生②

先月号では法然上人の誕生、天台宗僧侶である法然房源空の誕生について書きました。

法然房源空の「法然房」は房号と言い、通称名となります。房には僧侶の寝起きする場所の意味があります。複数人の僧侶が僧坊にいる時に、そこを取り仕切る役を「房主」と言うようになり、僧侶の通称の「坊主」という言葉が生まれました。僧名(諱)となった「源空」を現在では空号と言い、浄土宗西山派の僧侶が受戒(円頓戒を相承すること)すると、この空号をたまわります。

法然房源空となった法然上人は一体どのような心持ちであったのでしょうか？隠遁された後はどのように過ごされていたのでしょうか？

【黒谷に隠遁した法然上人は、名利を捨てひたすら出離・解脱を目指されたという。つまり佛教における出家者の目標である煩悩

を原因とする苦しみの状態から、佛教の修学と実践によって苦しみの無い状態を目指されたのである。その為に一切経(大蔵経と言ひ仏教經典の総称)を何度も読み返したという。その理解力は抜きん出たものと伝記には記されている。

ある時には師となっていた叡空と論争に及ぶこともあったという。円頓一実の戒体(戒の実体)とは何か？という論争において、叡空は「心が実体である」と言い、法然上人は「性無作の仮色(けしき)が実体です」と言い、師の意見と対立した。円頓一実とは唯一絶対の真理(法華経の教え)はすみやかに「さとりに」至らしめることを言う。

戒体とは戒の実体の意味であり、「さとりに」到らしめる動力源の一つと言えるものである。その戒体の実体について「心法戒」と「色法戒」の二種のどちらかが戒体であるのかという論争は古くからあったようだ。叡空は「心法戒」が戒の実体と言ひ、法の法然上人は「色法戒」であると主張しているのである。

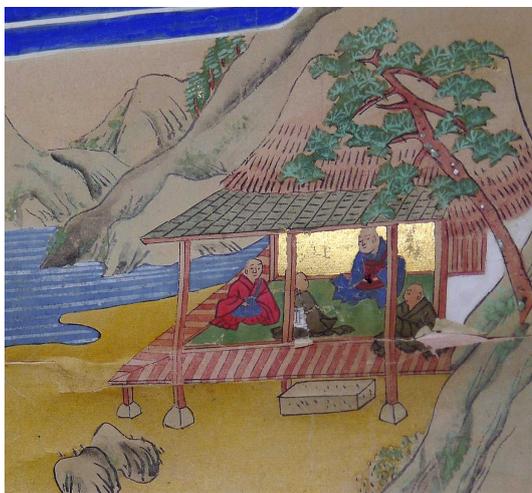
「心法戒」とは簡単に言う性と性善説とで

も言うべきもので人間は自然と善い心を持つているという考えである。「色法戒」は後天的なもの、受戒した後に目に見えず、表面化はされないが、悪いことをしようとした時にそれを押しとどめる作用、それが存在するので「色」(存在するもの)であるという考えである。

この論争の時に、自説を譲らない法然上人に対して激昂した叡空は側にあつた木製の枕を法然上人に投げつけたと言う。

法然上人が自室に戻った後、叡空が姿を現し法然上人に対して「考えてみたところ法然の説が正しかった」と謝罪したと伝えられる】

以下次号に続く(征阿)



叡空の下へやってきた法然上人の図



四月から我が小坊主、保育園に通い始めました。老いた母や祖母の遊び方では物足らなかつたのか、毎日嬉々として通い遊びまくっている様子。最近では目覚めて開口一番「さあ！保育園行こうか」と。サクサク着替え、通園バッグを手に出かけるのでありがたい事です。しかし、土日は休園なので毎週それを諭すのに些か苦労いたしますが。

さて、六月十九日は桜桃忌。太宰治の命日です。正確には入水したのは六月十三日ですが、遺体で見えられたのが十九日。そして奇しくもこの日は太宰の誕生日でもあります。誕生日と命日が同じとは。。。オボエヤスイ。

ご多分に漏れず、私も若い頃は「脆くはかない物」に憧れたもので「あやういモノ」の筆頭、太宰治を読みました。読んだ勢いで津軽へ行こう！と友人と青森へ行ったのは二十代前半の頃。

太宰の故郷は青森県五所川原ごしやわらの金木かなぎ。こ

こに生家が残っています。「斜陽館」という名前で現在は太宰資料館ですが、訪れた二十数年前は旅館でしたので宿泊できました（今となれば貴重な体験です）。青森の片田舎の宿に泊まるなんて酔狂な客は総じて太宰ファンですから、各々の部屋に引きこもる事はなく、イワクつきの部屋を順に訪問。ご縁で同じ日に斜陽館で出会った者同士がお酒を飲みながら語らう楽しい一夜でした。

## こもりうた⑰

翌日は二日酔いを引きずって隣

駅の芦野公園へ。ここには太宰の文学碑、太宰橋と名付けられたた

だの木製の小橋、「疎開時に太宰の姿見かけしは入江の木陰ここらあたりぞ」などとファンファンの心を更に煽る木札が立てられており、旧駅舎は『ラ・メロス』なる喫茶店。

当然のように皆がそこ

で珈琲をいただき、し

ばし静かにひたる訳で

す。



そうなると真つ直ぐ名古屋に帰れませんか（若い！）。東京で途中下車。日暮れを待ち、いざ銀座、目指すはバー『ルパン』。

お行儀の悪い半跣思惟像の様な姿の太宰の写真は、このバーで撮られたもの。私達が訪れた日は幸い込み合ってもおらず、件の写真の壁際の席を眺められるカウンタ―に座り、献杯。



ちなみに、『ルパン』の見所は太宰の席だけではありません。私がこれまでに見た中で最高齢のバーテンダーとメイド。舞台女優の如くメイクを施したママ。。。目が釘付け。

いずれも喜寿越えか（当時）。

ゆったりと時の経る空間を感じられるバーです。

訶梨帝母

## 負の流れ

「この間行ったお葬式、今どき珍しく自宅でやったんだけど、分かりにくい家で、迷って大変だったよ」

「えっ？葬式って、ちゃんと看板が出るんじゃないの？車を運転していると良く見かけるじゃないの？【〇〇家式場】って」

「そうそう、あったよな。でもさ、私が行ったところは、自治体の条例で看板が出せなくなっただって」

「えっ？そんなもん、何か月も何年も置いておくわけでもないし、長くて3日ほどで撤去するじゃないか！いちいち目くら立てることか？」

「いやあ、いろんな批判があるらしいんだよ。『個人のこと公道、公の場を使うな』とか『それが許されるなら、他の宣伝なんかもいいことになるぞ』とかさ・・・」

「おいおい、葬式だぜ！人が亡くなってるんだぜ。ああ・・・なんか、だんだんそういうふうになっていくよな・・・世の中がいろんなことに寛容ではなくなっていく・・・そして、

死というものを軽んじていく・・・そして、そういう意見が通り、【一般的】となっていく・・・」

「うん・・・悲しいよな・・・確かに、そういう例外を認めないということは『人が亡くなる、ということを重ねて捉えていない』という証しとも言えるよな」

「そうだな・・・近所さんなんか亡くなると昔は一日仕事を休んでだな、いろいろやっただよな」



「一日どころか、三日休んでいろいろ手伝ってたぜ。それと【隣組】とかもあったよな」

「皆で列を組んで、花輪や吹き流しを持ったりしてお墓に行き、皆で穴を掘ってあげる。」

一日かけてやっただよな」

「今は・・・全て簡略化。そして、お金を支払って、仕事として全くの他人がそういうことをする。【ビジネス】なんだ・・・」

「人の死に関する儀式なんかを端折る、簡略化するということは即ち人間、人命を軽んじる、ということに繋がっていくような気がしてならないんだ」

「昔は、法事だって、平日であろうが、ちゃんと命日にやっただよな、それで仕事を休んでも許し合う空気があったんだよ。今は、何だ、葬式だって、親族でも

『お通夜で済まして、葬式の日は出勤しなさい』  
って感じだもんな」

「それで、人の死というものにきちんと向き合って、【生とは？】、【死とは？】、とか考えることができるかよ」

「私は思うんだ、そうやって人の死というのが軽んじられるようになり出した頃と、信じられないような殺人事件などが増えだした頃が見事に合致するんだよな・・・」

## オリーブが教えてくれること

境内のオリーブの木がミルク色の花をいっぱいにつけています。最初の一本はカミさんが買ってきました。その後、檀家さんから小豆島のお土産としていただいた木も含めて、4本に増えました。

オリーブオイルが健康に良いことはよく知られています。また、実を塩漬けたピクルスはサラダにも使われますね。南フランスではアペリティブによく添えられています。

オリーブは平和、勝利、長寿、友情、豊かさの象徴とされています。それは次のような歴史や伝説に由来しているようです。

平和…ノアの箱舟から放たれた白い鳩がオリーブの枝をくわえて戻ってきたことで洪水が収まり始めたと判った。

勝利…ギリシャ神話の神ゼウスが競技の勝者にオリーブの枝で作った冠を与えたことから、オリンピック競技の勝者にも同様に授与されることになった。

長寿…寿命は平均で三百〜四百年。パレスチナにはキリストさんの時代にさかのぼる樹齢二千年以上の木が残っているとか。

友情…メソポタミヤの王が客人にオリーブを振る舞う絵があり、紀元前二千年頃には友情の意味を込めて使われていたと判る。

縁起の良い木で「地域おこし」と、オリーブの植樹を進める自治体が増えています。



品種改良が進んだことで、気候温暖で雨の少ない地域だけでなく、日本海側の雪の多い地方でも育つのです。地域の連帯が薄れてきている昨今、素晴らしいアイデアですね。

でも、目立ちません。思いつ切り自己主張しているような樹形ではありません。花も、直ぐ傍まで近づかないと良く見えない。実がよく成る年と余りつかない年が交互に来ます。そうしながら成長していき、平均して百五十年ぐらい実をつけ続けるのです。

古い木の方がまるやかで美味しいオイルが取れると聞きました。伐られて材木にされても、堅く緻密で、油分が多く耐久性に富むことから、装飾品や道具類にも使われ、特に組板、サラダボール、スプーンなどの身近な台所用品に加工されています。

オリーブの木を眺めていると、歳を取って生きるとはどういうことか、教えてくれているような気がします。

歳を取るとは、変わることです。目立たないように生きていても、歳と共に変わるものだけが生き延びるのです。年老いていくのに、若かった頃の追憶にただ浸っていても、苦しいだけです。

二十代の頃には気づかなかったことで、六十を過ぎて判ったことがあります。もつと年老いて、姿形が無くなっても、次の世代が使ってくれるものを残すことです。

「知識や知性というのは、行動をともなつた時に、価値あるものへと変貌を遂げる」  
(誰の言葉だったか思い出せません…)

# 観経物語(95)

正宗分(しようじゅうぶん) その49

第十観音観(かんのんかん) その4

《本文その4》

(観世音菩薩の) 其の余の身相は、衆好具足し、佛の如くして異なること無し。唯頂上の肉髻、及び無見頂の相のみは、世尊に及ばず。是れを観世音菩薩の真実の色身を観るの想と為し、第十観と名づく。

《意味・訳文》

(観世音菩薩の) その他の身体の様子や特徴も、もろもろの形が備わっていて、無量寿佛(阿弥陀佛)と同じであり、異なるところはないのである。ただ、頭の頂にある、肉髻(隆起した肉の固まり、もしくは頂骨の隆起が髪を頭上に集め束ねたもとどり・たぶさのように見えること)の形や様子と、誰も見ることが出来ないその最上部の形だけが、世尊(ここではおシヤカさまではなく無量寿佛と考えられる)に及ばないだけである。これを観世音菩薩の

真実の姿かたちを見る観想とよび、第十の観と名づける。

《私訳》

ここで、世尊(おシヤカさま||釈迦)が、観世音菩薩と無量寿佛(阿弥陀佛)とが、身体的特徴は同じであり、ただ頭の上の形が少し違っているという点を強調しておられるところに留意すべきです。と言うことは、後世の私たちがよく見る阿弥陀佛とその両脇に立つ観世音菩薩と勢至菩薩のいわゆる弥陀三尊像では、大体が阿弥陀佛が大きくて観音・勢至の両菩薩は三分の二ぐらいから四分の三ぐらいの高さに描かれていたり造られていたりしますが、違いがあるのは頭部の形だけで、身長差を付けたりするのをおかしいということになります。そもそも『身体的特徴が同じ』であるということは、阿弥陀佛も観音・勢至の両菩薩も、その「本質」は同じであることを示唆されているわけですから、色身、すなわち姿かたちあるものとして表現される場合に於いては、佛と菩薩という師弟の上下関

係の違いによる頭部の相貌の違いのみが表現されているだけであるべきなのです。そのところに私たち凡夫の価値観を持ち込んで、佛は大きく菩薩はやや小ぶりという、見た目の差異を言うべきではなく、私たちは阿弥陀佛と観音・勢至の両菩薩の本質は同等であるという点に思いを致すべきなのです。それは第七華座観のところでも韋提希夫人が空中に出現した阿弥陀佛と同時に観音・勢至の両菩薩を佛力によって見たというところで、表現され証明されているのです。

《幽思房》

